人文社会科学専攻　人文学プログラム　指導教員一覧

(注) 下記教員一覧は，2023 年 4 月 1 日現在(2024 年 3 月退職等予定者を除く)のものです。
(注 2)※印が付してある教員については，標準修業年限内の退職等予定者であるため，当該教員を指導教員として志願する者は，必ず事前(検定料納入前)に，広島大学人文社会科学系支援室(文学事務室)に問い合わせてください。
※1:2025 年 3 月退職等予定者，　※2:2026 年 3 月退職等予定者を示す。

比較日本文化学	教授	高永　茂 ※2	日本語や日本文化を相対化し比較・対照研究を行うには，まず日本語と日本文化そのものを熟知する必要がある。教育においては，①言語学(とくに社会言語学と語用論)の観点から日常生活のなかで日本語が使われるときに観察される諸現象を分析すること，②言語文化学の観点から日本文化の特徴を追究すること，の二点に重点を置きながら授業を展開する。研究面では，コミュニケーション論と社会言語学を専門としている。コミュニケーションのメカニズムの解明，待遇表現の研究，言葉に係わる社会的な問題などに取り組んでいる。言語現象の理論的な説明に終わるのではなく，その成果を教育と実践に還元していくというのが基本姿勢である。
	教授	中村　平	台湾でのフィールド経験を軸に，日本植民主義と台湾先住民の歴史経験や暴力的な記憶について研究してきた。近年は autoethnography の方法論にも関心をよせている。参加者とは日台関係論のテーマに限ることなく，より広い主題を国際日本学や人類学，歴史学，社会思想史，文化理論などの領域との関係性において再考し，研究と教育の重なりにおいて比較日本文化学や人文学を開く実践を行いたい。同時に知の権威化や制度化を考え直し，知の流通と教育・研究的な営み自体を議論の俎上にあげる。「学内」にとどまらないゼミナールの場を触発され合う知の共同体と考え，発話し聞き・書き表現することを洗練させる歓びと共に，それらのトレーニングを分かち合いたい。
	教授	本田　義央	比較日本文化学分野で，日本とアジアの文化の比較研究を行っている。研究の基礎は南アジアの古典文化にあるが，それがアジア諸地域に地域を超えて伝播しさまざまに受容されていく過程や受容ののちの変化に注目している。また，かならずしも南アジアに端を発することのみならず，諸地域の人の営みの諸相を文献資料に基礎をおきつつ，比較を通じて明らかにすることに関心をもっている。あたりまえのことにでもどれだけの関心をもちこだわることができるか，得心がいくまで調べ考えることを大切にしている。
	教授	溝渕　園子	日本をひとつのモチーフとして対象化し，比較の手法によってそれを相対化する場合，さまざまなレベルで，「異文化」とどう向き合うかという問題が浮上する。教育面では，主に近現代日本の文芸メディアを比較文学の観点から検討しながら，広く文化の動態をとらえることを重視した指導を行う。研究面では，19 世紀から 20 世紀にかけての日本とロシアの文学的関係に着目した比較文学を専門としている。受容論／影響論のほか，異文化表象や翻訳文学，「世界文学」の概念の変化，文学と美術のジャンル間交渉など，近現代の言語文化の「越境」をめぐる諸問題に着目した研究に取り組んでいる。
	助教	劉　金鵬	戦後日本知識人の言論，特に「アジア」をめぐる諸言論について　研究を行っている。近代化論，ナショナリズム，アジア主義といった思想課題と格闘していた知識人の言論を考察し，比較的視野で近代以降における「アジア的」な思考回路を探求している。また，近代化以来，日中両国の間で共有されている思想課題に注目し，「科学」に対する批判と擁護を中心に，国の枠組みを超えて分析している。教育においては，戦後の総合雑誌を中心に当時の論壇を再現し，知識人の間で行われた議論を再検討している。さらに，同時代史の視座で，新しい日本文化のあり方を取り上げ，戦後における日本文化の変遷をたどっている。
	助教	李　麗	専門は児童文学，特に日中比較児童文学である。教育面では児童文芸雑誌，絵本，童話などを取り上げて，テクストにとどまらず，ビジュアルの観点にも注目する。また，これらの作品を解析するときには，他言語による作品や他ジャンルの芸術作品と比較しながら，基礎的な研究方法を学ぶ。研究面では，20 世紀前半の日中児童雑誌における児童出版美術の機能を文学・美術など多角的な面から考察してきた。特に児童雑誌における表紙絵，口絵，挿絵に注目し，その表象，特徴および時代性との関係，読者への機能，編集者の意図などについて研究している。

哲学	教授	後藤 弘志 ※2	(1) 主たる研究対象は，フッサール現象学における人格概念である。中でも人格が哲学的反省を通して，よりよい人生を送ろうとする際の決断を下支えする「よき習性」の役割に注目している。(2)この人格概念の出自を明らかにするため，フッサールにおける自然と精神，理論的と価値論的という対立図式を，同時代の新カント派，ディルタイ，および価値哲学者たちにおける図式と比較研究している。(3)さらに，カント以降，現象学派の価値哲学において復活を遂げるまでのよき習性としての徳概念の失われた歴史を追いかけている。(4)近年は，日本の近代化過程における人格概念導入の経緯に関心を寄せている。
	准教授	赤井 清晃 ※1	哲学の方法としてのディアレクティケー（哲学的問答法）の意味の解明と，現代的意義を考察する。 (1) プラトン及びアリストテレスを中心とする西洋古代哲学史を扱う。ソクラテス以前の哲学者から，プラトン及びアリストテレスを経て，古代後期に至るまでのギリシア語文献の読解法・文献学的処理。 (2) 西洋中世におけるアリストテレス解釈の問題を扱う。アリストテレスのテクストのラテン語訳と註解書を中心とする，ラテン語文献の読解法。 (3) 西洋古代・中世の論理学史。現代の記号論理（第1階の述語論理まで）の知識を前提として，非形式論理のあり方を探究する。
	准教授	硲 智樹	近代ドイツの哲学者ヘーゲルの思想をテキストに依拠した厳密な文献学的研究に基づいて解明及び解釈するという研究を行っている。主な研究内容として，その論理学・現象学・法哲学研究を中心に，体系構築に至るヘーゲルの思想形成過程，カント及びドイツ観念論におけるヘーゲル哲学の位置づけや相互的影響関係，さらには現代分析哲学との関連でヘーゲル的着想の現代的意義等々を明らかにすることなどを試みている。そのほか，自由・承認・正義などを鍵概念として現代の社会・政治哲学にも取り組んでおり，個人の自由を実現できる社会の在るべきかたちを模索している。大学院の授業は近代における古典的哲学文献の講読が中心である。そこでは丁寧で緻密な読解を心がけ，哲学文献を読むための基本的能力を養いながら，参加者同士での議論を通じ，各人が自らの思索を深めていくことを目指している。
インド哲学	教授	根本 裕史	インドで生まれた仏教思想やサンスクリット文化は，ヒマラヤ山脈を超えてチベットに伝わり，独自の発展を遂げている。授業ではインドからチベットまでを対象とし，文化史や思想史について総合的に議論すると共に，サンスクリット語やチベット語の原典の読解法について基礎から指導している。専門はチベット仏教思想であり，主にゲルク派の創始者ツォンカパの縁起思想，菩薩思想，仏身論の解明に取り組んでいる。また，近年ではチベットの美文詩や詩論にも関心を広げ，同地で仏教思想と文学の融合が成立した過程について考察している。最先端のチベット学の研究成果を授業にフィードバックし，学問することの喜びを大学院生達と共有することを目指している。
	准教授	川村 悠人	授業では，ヴェーダ語や古典サンスクリット語で著された原典を厳密に読み解き，古代・中世インドの思想や文化を学生たちとともに発掘している。その中で，自らの感性に対して何かうったえかけるものを学生たちに発見してもらえるように努める。最近の主な関心は，インドの言語論，詩論，神話に向いている。文献学的な研究の成果が，神話学，歴史学，宗教学，民俗学，文化人類学，言語学などの隣接分野の研究にいかに貢献し得るかを常に意識し，同時に，他分野の研究成果を上手く摂取して活用することを心がけている。
倫理学	教授	衞藤 吉則	(1)ドイツの思想家ルドルフ・シュタイナーの教育思想について研究。2018 年からは，NPO 法人を創設し，シュタイナー教育の理論と実践に基づく発達障がい児のための療育活動を展開している。 (2)近代日本倫理思想（西晋一郎，山本空外等）や禅思想（仙厓）を研究。これらの思想解明を通して，「平和理論の構築」をめざしている。 (3)実際の教育においては，伝統的な倫理思想の解説に加え，「教育と倫理をめぐる応用倫理学的な課題」にも取り組んでいる。今日の教育問題の背後にある物の見方や原理，それに「善さ」の問題について，倫理学の観点から，学生たちと議論している。
	准教授	後藤 雄太	(1) 存在の意味・価値の喪失，「ニヒリズム」の問題を，主にニーチェとハイデガーの思想を手掛かりに研究している。また，東洋思想における空や無の哲学も視野に入れつつ考察を進めている。さらに，単に思想研究にとどまるのではなく，その現代的意義にも注意を払っている。 (2) 生命倫理学的課題としては，終末期医療の在り方や死の受容の問題といった，現代における「死に関する問題」を研究する一方，人工妊娠中絶や優生思想といった「誕生に関する問題」にも取り組んでいる。 (3) 情報倫理学的課題としては，現代社会を席巻するインターネットやスマートフォンなどの情報技術との然るべき＜距離＞の取り方について研究している。 (4) 実際の教育においては，東西の伝統的な倫理思想の学習を重視する一方，現実世界に対する実践的な問題意識を持って思索するよう指導している。
	助教	岡本 慎平	19 世紀イギリスの哲学者 J.S.ミルを中心にしたイギリス経験論の道徳哲学に関する思想史的研究，価値論や規範理論に関する現代哲学の理論研究，およびロボット工学や宇宙開発に関するテクノロジーの倫理問題に関する研究をおこなっている。授業では学生の関心に合わせて，(1) 古典的文献の訳読および解釈，(2) メタ倫理学・規範倫理学に関する有力論文の検討・考察や，論争状況の理解のためのサーヴェイ調査，(3) 人工知能など現代の諸問題に関する最新の研究状況の把握のためのジャーナル論文の調査検討などをおこなっている。

中国思想文化学	教授	有馬 卓也 ※1	(1)前漢期を中心に当時の思想が有する特質，とりわけ儒教国教化が成立する以前の黄老思想，さらにそれ以後の道教成立に至るメカニズムなどについて教育・指導する。(2)また，中国古典学を知識として持つ日本の近世・近代(特に江戸後期から幕末・明治期にかけて)の漢学者・知識人たちについても教育・指導する。(3)上記の諸問題を解析するための資料の翻訳技術として漢文訓読法を主に用い，その技術と意味について，教育・指導する。(4)中国思想文化の諸問題に関する卒業論文・修士論文・博士論文の作成について教育・指導する。
	教授	末永 高康	戦国から秦漢期にかけての諸思想を主たる研究対象としている。この時期に記されたテキストが，近年，竹簡や帛書の形で大量に出土してきており，伝世の資料によってのみ組み立てられてきた旧来の思想史の見直しが求められる状況となっている。そこで，これら新資料がもたらす知見を用いながら，伝世資料の読み直しや再評価を行い，当該期の思想史を新たに構成すべく研究を進めているところである。現在は特に，『礼記』，『大戴礼記』に収められた諸篇の資料的価値を再検討しながら，戦国儒家思想史の再構成を行っている。教育面では，諸注釈を用いて先秦諸子のテキストを読み解いていく技法を教授していくとともに，新出土資料を含む各種資料を用いながら思想史を組み上げていく方法について指導していく。
日本史学	教授	奈良 勝司	江戸時代が近代に移行する際，人々の行動や発想の前提にある認識の体系(世界観)がどう変わり，今の日本人のものの考え方をどう規定したのかについて，(未発の可能性も含め)19世紀という視座から多角的に検討している。特に，近代日本の自己中心的な世界観や共同体主義，契約観念(の不在)の構造に関心がある。日本人論・日本文化論への，歴史学的なアプローチと言えるかもしれない。直接は見えない思想や認識を対象とするので，概念を扱う訓練や物事を深く考えるセンスが求められるが，他方では，それゆえ幅広い史料への目配りと発掘も大切になる(理論と実証は矛盾しない)。なので，未刊行の文書を含む史料を活用し，自由に，しかし厳密に読み解くことを重視している。
	教授	本多 博之 ※1	中世後期の中国・瀬戸内海地域から北部九州地域を対象に，社会経済の歴史的展開や大名権力の権力編成・領国支配について研究している。近年は，中近世移行期の貨幣流通の実態を明らかにすることで石高制の成立過程について考察し，中央政権の国内支配や，地域大名の領域支配・財政構造を解明した。また，石見銀山をめぐる諸問題や安芸厳島の歴史や文化についても，現地調査を交えながら研究を進めている。教育面では，中世の政治・経済・文化など，様々な分野について構造的に理解させるとともに，古文書・古記録など各種資料の分析方法を指導し，歴史的事実を再構築する手法を修得させるよう努めている。
	助教	殷 暁星	近世～近代日本の民衆教化及び道徳倫理生活を分析することで，日本と東アジアの民衆教化思想が関係しあう歴史の全体図を描き出す研究を行っている。具体的には，近世東アジアに共有された道徳律がいかに日本の民衆に浸透したのか，近世日本の民衆の道徳倫理の形成は東アジアの思想展開にどう位置づけられるのか，東アジアとの連関の中で形成された近世の民衆教化思想が近代以降どのように変容したのか，などの課題に取り組んでいる。
東洋史学	教授	金子 肇 ※1	中国近現代史，とりわけ 20 世紀に入って以降の清朝末期・中華民国初年から中華人民共和国成立当初の 1950 年代前半までを研究対象としている。主な研究テーマは以下の三つ。①「近代中国の国家統合と中央・地方関係」：中華民国期(1912～49 年)における中央政府と各省政府との関係を行財政史の視点から分析する。②「上海における同業団体と商工業税政」：上海における伝統的な同業秩序・同業規制と近代的な商工業税政との関係を，清末から人民共和国成立当初まで追求する。③「近代中国における憲政の展開と国家」：中華民国期の民主的政治体制の形成過程を憲法史の文脈を踏まえながら考察する。
	准教授	舩田 善之	モンゴル帝国時代のユーラシア中央・東部地域を研究対象としている。モンゴル帝国の拡大と統治に伴う多様な人間集団の移動と混住に対する関心から，前後の時代や隣接する諸地域も視野に入れながら，研究を進めている。とくに，多元的な社会の形成と展開，またそのような社会に対する統治制度の解明に従事してきた。中国史でいう元朝期(元代)を含め，中国本土とモンゴル高原に重点を置いている。大学院では，多様な内容・媒体・言語の史資料や現地調査の成果を活用しながら，政治・法制・社会から外交・戦争や経済・文化交流に至るまで様々なトピックに取り組みたい。
西洋史学	教授	井内 太郎 ※1	16-17 世紀イギリス絶対王政期の行財政史の研究を行っている。現在，とくに重点的に研究しているのは，次の2点である。まずこの時期の国王宮廷が，国王の支配装置としていかに機能していたのかについて，政治文化論的な視点から明らかにすること，第2に当時の船舶税問題を素材としながら，海軍改革，船乗り(＝海民)の世界，海洋論などを分析し，海から見た近世イギリスの歴史を描こうとしている。
	教授	前野 弘志	古代地中海世界史およびギリシア語碑文学・パピルス学を研究している。碑文学は石や金属の板などに刻まれた文章を対象とし，パピルス学はパピルス草から作った紙にインクで書かれた文章を対象とする。具体的には，石板に刻まれてアクロポリスやアゴラに建てられた決議碑文や彫像などに刻まれた奉納碑文，鉛の板に書かれた呪詛，パピルスに書かれた結婚契約書や労働契約書，庶民が書いた手紙，魔術のマニュアルである魔術書などを読んでいる。これらを読むことにより，古代地中海に生きた人々の国家，政治，社会，宗教，生活，心性を垣間見ることができる。碑文を読み解く作業は，スリリングで魅力的な仕事である。またレバノンの世界遺産アルバス遺跡で発見された大型墳墓の発掘研究を行っている。
	准教授	足立 孝	スペインおよび南フランスを中心とする西地中海世界を地理的枠組みとし，拡大・形成途上のラテン・ヨーロッパの「辺境」とみなされ，その空間的・社会的特殊性ばかりが強調されてきた当該空間が，じつはラテン・ヨーロッパそのものの社会的性格を先取りするすこぶる先進的な空間であること，それゆえ「辺境」からラテン・ヨーロッパなる「中心」を再検討する必要があることを論証すべく，社会経済史的，定住史・空間編成論的，史料論的な方法・手続きを駆使して具体的かつ実証的に研究している。

日本文学語学	教授	有元 伸子 ※1	日本近現代文学，とくに昭和以降の文学を専門としている。現在のところ，指導している学生の論文で多いのは太宰治・村上春樹・川上弘美といった近現代の作家に関する個別作家論・作品論であるが，雑誌研究や文学理論の考察等に取り組む学生もいる。読みの方法を研究対象に適用していく過程と，着実な解読とを基本にすえながら，学生個々人の関心に即して幅広く教育にあたっている。教員個人は，主として三島由紀夫の作品（小説・戯曲）を〈語り〉と〈ジェンダー〉の視点により研究しているが，ほかに，近現代の女性作家の動向や，中国地方の文学なども研究課題としている。
	教授	久保田 啓一 ※1	日本近世文学，特に近世和歌を主たる研究対象とし，近世の冷泉家とその門流，近世中期江戸の幕臣文化圏，全国各地の大名家の歌壇，及び雅文学たる和歌と対を為す俗文学の狂歌等を研究している。また，大田南畝，近世の紀行文，井原西鶴の浮世草子などについても論文を執筆しており，基本的には雅俗両方にわたる近世文学全般についての教育が可能である。教育方法は精密な注釈を施しつつ作品を精読し，そこからさまざまな問題点を発見させるというもので，論文執筆に際しては内容の充実のみならず正確な文章表現をも求めるという方針を貫いている。
	教授	白井 純	日本語学，とくに日本語史を主な領域とし，キリシタン版を中心とする研究と教育を行っている。授業では文献学の基本的な技法の習得を重視するが，キリシタン版はキリスト教宣教師が西洋式の印刷技法を用いて日本で出版した辞書，文法書，宗教書などであり，(1)ラテン語を中心とする多言語環境のもとで構築された日本語の文法書と辞書，(2)ヨーロッパの原典を翻訳し改編した日本イエズス会独自の宗教書，(3)ヨーロッパ諸言語の文字より遥かに複雑な日本語の漢字と仮名を本格的に活字印刷した出版物，(4)日本語を学習し実践的に利用した外国人による最も早い日本語学習，(5)世界各地に分散するキリシタン版のフィールドワークによる探索と調査，などの幅広い視点による自発的な探究心が成長するような教育の実現を目指している。
	准教授	下岡 友加	専門は日本近現代文学，日本語文学。⑴志賀直哉のテクストを中心とした生成論，並びに人称やナラトロジーに基づいた私小説の方法に関する研究。⑵黄霊芝を中心としたポストコロニアル台湾の日本語小説・俳句に関する研究。複数の言語を跨ぐ作家によって編まれた新たな日本語文学の表象可能性を剔出する。⑶日本統治期台湾で刊行された官製プロパガンダ誌『台湾愛国婦人』を中心とした雑誌メディア研究。植民地の獲得とともに拡張した日本文学の市場や政治性，海を渡った編集者・記者の役割，〈読む女〉〈書く女〉に求められたジェンダー機能等を解明する。以上三領域に関連する研究課題であれば，いずれも指導可能であるが，画像も含めたテクストの精読を礎とする教育を重視している。
	助教	高尾 祐太	専門は日本の中世文学。中世文学の基盤を為す知識の体系を明らかにすると同時に，その知的基盤に照らして文学作品のテクストを丁寧に読解することで，作品の新たな読み・価値・本質を浮かび上がらせる研究をしている。研究対象は，中世の和歌注釈・歌論・連歌論を中心に，時には軍記・説話にも及び，それらの基盤として共有されている仏教・儒教・道教の三教（或いはそこに神道を加えて四教）一致的な知識体系との聯関を探究している。授業では，テクストの丁寧な読解を重視し，まずは国文学の基礎的な能力を堅固に構築することを目指す。
中国文学語学	教授	小川 恒男 ※1	中国古典詩を中心に広い意味での語学的アプローチによる教育研究を進めている。一方では，その終焉を見届けるべく「近代」前夜とも言うべき清末の詩を読んでいる。詩人たちは時代に即した主題を見出し，新しい語彙を獲得しつつ，何よりも自らが詩人であることの意味を問い掛けなければならなくなっていた。また，文学が創作される「場」について考究するひとつのモデル・ケースとして六朝楽府を読んでいる。伝統的主題を踏襲する作品群が生み出される場は，新しい表現が試みられる実験室の機能を担うことになった。六朝楽府と清末詩とを読むことによって，中国古典詩をより大きな流れの中で俯瞰できるのではないかと思う。
	教授	川島 優子	中国明清期の白話小説，特に『金瓶梅』を中心として教育研究活動を行っている。明清期の白話小説といえば，日本人にもなじみの深い『三国演義』や『水滸伝』『西遊記』等の作品が挙げられるが，これらの作品は，その成立の過程，使用されている言語，受容の在り方など，いずれも従来の伝統文学とは様相を異にしている。そんな中，『金瓶梅』に関しては，伝統文学とも同時代の白話小説とも異なる成立の状況，言語的特徴，受容の在り方が窺える。『金瓶梅』は中国の小説史を考える上でもたいへん重要な作品だといえよう。また，中国の白話小説は日本人にもたいへん愛され，特に江戸時代においては様々な読まれ方がなされている。そこで日本における白話小説の受容についても研究と教育を進めている。
	准教授	陳 翀	中国古典文学・文献学の研究教育活動を進めている。研究の中心は以下の通りである。(1)中国中世文学・文献学，特に昭明太子及び白楽天を中心とする中世文学思想の変遷をめぐる研究。また，日本における『文選』『白氏文集』の受容についても研究・教育を進めている。(2)旧鈔本（写本）を中心とする東アジア漢籍交流史の研究。日本に現存する漢籍資料，特に旧鈔本資料を研究対象とし，宋代以前に伝わった『史記』『文選』『白氏文集』などの漢籍のテクストの原型を研究している。(3)東アジア近世及び近代学術交流史の研究。特に島田翰，王国維，魯迅を中心とする近代学者らの漢籍蒐集活動と学術思想の研究・教育を進めている。

アメリカ・イギリス文学	教授	大地 真介	専門は，ウィリアム・フォークナーやハーマン・メルヴィル等のアメリカ文学である。特に現在，フォークナーの技法と人種・階級・ジェンダーの境界のゆらぎのテーマについて研究している。主に論文指導では，フォークナー，マーク・トウェイン，トニ・モリソン等のアメリカ南部の作家，メルヴィル，エドガー・アラン・ポー，ヘンリー・ジェームズ等の 19 世紀アメリカの作家に取り組む学生を指導してきたが，アメリカ文学であればいかなる作家についても指導する。授業においては，アメリカン・ルネサンスやモダニズムやアメリカ南部の文学の主要な作品を扱い，精読とディスカッションを組み合わせた授業形態を取っている。
	教授	吉中 孝志 ※1	研究面では，17 世紀英国の中葉，清教徒革命期の詩人たち，アンドリュー・マーヴェル，ジョン・ミルトン等の作品を政治・宗教的脈絡の中で分析することに興味を持っている。教育面では，英詩(英語で書かれた詩)を対象とした研究指導，論文作成指導を行っており，さらにマーロウ，シェイクスピア，ウェブスターなどの初期近代の戯曲研究指導をも行ってきた。授業では，批評的自己表現能力，行間を読む方法，批評的思考方法を養成している。挽歌，墓碑銘に表れた「死」の主題，恋愛詩の中の感情表現といった普遍的テーマにも強い興味をもっているが，近年，学部教育で英文学史を教える関係上，批評理論と文学の「感動」を拠り所にしながら，「深く」だけではなく，「広く」英文学の作家，作品を教えようとしている。
	准教授	倉田 賢一	もともとの専門はジョージ・エリオットの小説と精神分析(フロイト・ラカン)的解釈だが，19 世紀・20 世紀小説全般，また文学理論の諸部門について研究をすすめることで，近代イギリス小説についての総合的な理論的枠組みの可能性を探りたいと考えている。そのような観点に加えて，日本人としてイギリス小説を読むことの意義について考えるために，カズオ・イシグロの小説に検討を加えてきた。直近の大学院のゼミでは，近代的アノミーに対する反動を代表する作家たちである，イーヴリン・ウォーと D.H.ロレンスの小説を扱っている(ただし，彼らの近代に対するレスポンスが正しいものであると考えているわけではない)。
	准教授	松永 京子	アメリカやカナダにおける原爆・核エネルギーをめぐる言説あるいは文化表象を研究対象とし，帝国主義・植民地主義の歴史的文脈や環境的視座などから研究している。特に，北米先住民作家やアーティストが，原爆，ウラン鉱山，核施設，原発，核廃棄物の問題をどのように文学・映像・芸術作品にとりいれているのかを，カルチュラル・スタディーズ，ポストコロニアル理論，環境正義などの学際的アプローチから分析してきた。授業では主に現代アメリカ文学作品をとりあげ，作家や作品に関する歴史的文化的コンテクストや，人種，階級，ジェンダー，セクシュアリティ，植民地主義，環境問題など幅広いテーマについて考えることに重点を置く。また，文学作品の複雑な位相を理解するための複眼的かつ批判的な視点を養い，自らの疑問点や関心を探究する場を目指す。
	助教	松本 舞	ヘンリー・ヴォーン，エイブラハム・カウリー，リチャード・クラショーなどの 17 世紀英国の詩人たちの作品を中心にイギリス詩の研究を行っている。近年では，錬金術思想をはじめとする神秘主義思想や科学思想から初期近代の英文学の分析を試みている。教育面では，イギリス詩に加え，現代詩，アメリカ詩を対象とする研究指導を行っている。また，英米文学作品に描かれた猫を中心とした比較文化や，ジョン・ミルトンなどによって書かれた叙事詩と現代のサブカルチャーの接点，詩作品と芸術との関連なども探っている。
英語学	教授	今林 修	後期近代英語期における英国小説の言語・文体研究を行っている。とりわけヴィクトリア朝を代表する小説家チャールズ・ディケンズが主たる研究対象であり，彼の作品に描出された「文学方言」の研究を行ってきた。最近は，ディケンズの言語・文体研究と並行して，英国 19 世紀の英語の特徴を音韻・形態・文法・統語・語彙の面から社会言語学やコーパス言語学の最新の手法を援用しながら調査している。プロジェクトとしては，故山本忠雄(前広島大学教授)の意志を継ぎ，広島大学と熊本大学の英語学講座出身のディケンズ学者と『ディケンズ・レキシコン』を編纂している。また，英文学作品の電子テクスト化を TEI に準拠して行い，その国際的な基準の確立と大規模な英文学アーカイヴ構築を目指している。
	教授	大野 英志	14 世紀後半の英国詩人ジェフリー・チョーサーの言語研究を行っている。これまで主として，非人称構文を研究対象とし，同一動詞が非人称・人称用法を持つ場合にその用法の差の意義およびその差から可能となる解釈を，語用論なども用いて調査してきた。その際，同時代の他の詩人や電子コーパスなども扱い，通時的・共時的な考察も行っている。大量電子コーパスが整備されつつあるなかで，コーパスを利用してわかることと，精読しなくてはわからないことを意識して，当時の語彙や文法項目の用法を明らかにしようと努めている。

ドイツ文学語学	教授	小林 英起子 ※2	18 世紀ドイツの啓蒙文学，古典演劇をはじめ，西洋比較演劇史，近代ドイツ文学を研究している。近年はレッシングの喜劇と演劇論・演技論，C.F.ヴァイセの演劇と作劇法，ザクセン喜劇の手法，ノイバー夫人の演劇改革に関心を持って研究してきた。寓話文学，児童演劇も扱い，近現代の児童文学と関連づけて論じている。 授業では近現代文学や文化論のテキストを取り上げ，解釈や技法の他，批評，ドイツ語圏の歴史的，文化史的背景も考察する。論文指導では，具体的な課題設定と新しい研究成果を反映したアプローチを心がけている。中世から現代までの抒情詩も取り上げて学生と鑑賞し，詩の技巧や文学的背景について検討している。
	准教授	今道 晴彦	コンピュータに蓄積された言語データから言語・文体情報を収集・計量し，言語分析することを本務とするコーパス言語学（ドイツ語）を研究対象としている。(1)類義語・多義語の使い分け，(2)学術ドイツ語の選定，(3)複数のバリエーションを有する文法現象の研究をはじめ，最近は(4)作文データを元にしたドイツ語学習者の過剰／過少使用の分析や，(5)要約文の自動判定の研究なども行っている。大学院の演習では，ドイツ語の原書講読を最優先しつつ，データ処理に関する実習も行っている。また，分析で得られた知見を教材開発や各自の研究課題に応用することを目標にしながら授業を行っている。
	助教	古川 昌文 ※2	フランツ・カフカの文学を主対象として，その「わからなさ」に接近するために，作品自体の分析とともに，19 世紀後半から 20 世紀前半の文学や文学理論，さらに精神分析学や哲学・思想などとの内的関連を研究している。また，その「わからなさ」がしばしば相矛盾する多様なカフカ受容につながっていることについてもメタ・テクスト分析として関心を向けている。 授業ではカフカに限らず主に 20 世紀前半の文学作品を素材として精読することを基本とし，参考文献の併読とディスカッションを通して，それらの文学が 19 世紀的リアリズムから何を継承し何を捨てて新しい技法を作り出しているかを理解することに重点をおいている。
フランス文学語学	教授	宮川 朗子	19 世紀フランス小説，とりわけゾラの作品を主な研究対象としてきたが，近年は，新聞と文学との関係に興味を持っている。とりわけ新聞連載小説に注目し，この形式の小説と時事的な報道や読者との関係性について考察を進めている。 教育においては，テクストの読解が文学研究の基礎であると考えているが，授業では，ただ読んで訳すだけでなく，読後に議論の時間を設け，解釈の相違や多義性の有無を確認している。また，論文指導では，論文制作の手順と必要な作業を説明し，手順に従って作成した提出課題の添削を通して，論理的で説得力のある文章を作成する力を養うための指導を心掛けている。
	准教授	O.セカルダン	文化のハイブリッド性と移動の概念について研究している。そのため，啓蒙主義時代のフランス文学から現代のフランス語文学（とりわけアンティール諸島の文学）までの広い対象について，これらの概念を，比較文化的な見地から分析している。教育においては，言語と文化の習得によって，学生がフランス語圏において積極的な活動ができるようになるために，フランス語を習得させることに重点を置きつつも，文学の授業においては，テクストの歴史的，文化的，社会的コンテクストに同時に注意を向ける複数テーマ的なアプローチを試みている。単にテクストの読み方を学ぶのではなく，テクストと思想のつながりを探しながら，理解し，解釈できる力をつけさせることを目的としている。
	准教授	O.ロリヤール	フランス古典文学とラテン語の研究から出発したが，現在は，外国語としてのフランス語とフランス文化の教育を専門としている。外国語の運用能力を習得させるための方法論の問題が中心的な関心事であり，日本の学習者に固有の問題を克服させるのに適したフランス語教育法を模索している。具体的には，非常に逆説的ではあるが，オーラル・コミュニケーション能力の習得を最適化させる上で，翻訳という方法が果たしうる役割について研究している。 コミュニケーションの授業では，母語と学習する言語とを直接的に突き合わせるこの方法を，部分的に適用している。また，文化の授業でも，コミュニカティヴ・アプローチを基本としており，学習をより自発的なものにするよう努めている。
言語学	教授	上野 貴史	言語学が科学の一学問として発達した歴史言語学から，構造言語学や普遍文法にみられる言語事象を講義・演習形式で教育を行っている。 専門分野では，①「言語形式の通時的変化」，②「非対格構造における統語現象」，③「コピュラの通言語学的研究」をテーマとして研究している。①においては，イタリア語における音韻・形態・統語変化について文学作品をコーパスとして調査している。②においては，イタリア語・英語の複合語・派生語の生成過程を研究する中で，過去分詞派生語についての指摘を行い，これを契機として，非対格構造の統語論を研究している。③においては,通言語的なコピュラの統語機能・構造を研究している。また，日本語対照言語学に関する教育と研究も行っている。
	准教授	尾園 絢一	インド・ヨーロッパ語比較言語学成立以来，今日まで発展を続けている古インドアーリヤ語(いわゆるサンスクリット)歴史文法，特に動詞形態論を専門とする。インド・ヨーロッパ語の中で中心的な位置を占める古インドアーリヤ語(特にヴェーダ語とよばれる古い言語層)，古イラン語(アヴェスタ語，古ペルシア語)，ギリシア語(特にホメーロス叙事詩の言語)を主な資料として，重複動詞語幹の形態・機能の解明を目指して研究を行っている。授業では古インドアーリヤ語をはじめとするインド・ヨーロッパ各言語間の比較．インド・ヨーロッパ祖語(共通基語)の再建などの手法を学びながら資料を分析し，インド・ヨーロッパ語歴史文法の原理の習得を目指す。

地理学	教授	友澤 和夫	(1)現代インドの空間構造の研究，(2)インド工業化の研究，(3)日本の新ビジネス・成長ビジネスに関する経済地理学的研究，の 3 つを現在遂行している。特に(1)と(2)については，広島大学現代インド研究センター長として，重点的に力を入れている。こうした研究の成果に基づいて，経済地理学や都市地理学を中心に人文地理学を幅広く教育している。指導学生は，産業でいえば工業・商業・サービス業に，地域でいえば都市や産業地域に興味を持つ者が多い。演習では学生の主体性と創造性の向上を重視した指導を行っている。博士課程リーディングプログラム（たおやかで平和な共生社会創生プログラム）の学生も受け入れている。
	准教授	後藤 拓也	これまでに行ってきた研究は，(1)アグリビジネスの地理学的研究，(2)企業の農業参入に関する地理学的研究，(3)インドのブロイラー養鶏産業に関する地理学的研究，の3つである。このうち(1)については，すでに研究成果を単著『アグリビジネスの地理学』（古今書院）として 2013 年に刊行した。また(2)と(3)については，現在もフィールドワークにもとづいた研究を継続している。これらの研究成果を活用して，農業地理学・農村地理学を中心とした人文地理学の教育ならびに論文指導を行っている。大学院の演習においては，文献購読を通じて人文地理学の研究動向を学ぶことに加え，フィールドワークによる資料収集や聞き取り調査に重点を置いた指導を心掛けている。
	准教授	後藤 秀昭	地形の発達史を紐解く中で地殻変動や活断層の変位について検討する変動地形学的研究を主に行っている。研究手法としては，空中写真や数値標高モデル（DEM）を用いたステレオ画像の判読による活断層の認定や地形の分類，現地での地形計測や地層の観察である。最近は，地理情報システム（GIS）やDEMを用いることで変動地形研究の新展開を試みている。陸上のみならず，海底の地形についても対象としており，変動地形研究者にしか読み取れない活断層の特性や地形発達について検討したいと考えている。その他にも，自然災害や地域の開発など，地形と関連した自然地理学的あるいは環境地理学的な課題についても検討したいと考えている。
考古学	教授	野島 永	日本列島における古代国家形成以前の考古学的研究を行なう。弥生時代から古墳時代の鉄器文化がどのように社会を変容させていったのかをテーマとした遺物論を展開する。また，古代国家成立以前に存在した世界各地の首長制社会の考古学的研究事例から，金属文化がさまざまな社会構造に関与していたことを明らかにする。金属文化の発展を視座とした首長制社会の比較考古学的研究を推進する。さらに，弥生時代墳丘墓や古墳時代前方後円墳など墳墓遺跡の発掘調査をおこない，その発展過程を総合的に考察する。最新の調査研究技術の習得とともに，考古遺物から古代社会の実像を見出す学際的研究ができるように指導する。
	准教授	有松 唯	古代オリエント（中近東）の考古学を専門としている。中近東は，人類史上の画期的現象が自生し，自律的に展開・発達した稀有な地域である。我々の社会がどのように成り立ったのかを考えるには当地の歴史の解明が不可欠であり，同時に，「我々はどこからきて，どこへゆくのか」という人文学の普遍的命題に向き合うにも最適なフィールドと言える。 なかでも，アッシリアやアケメネス朝といった，古代帝国の成立過程の解明を目指している。とくに，アケメネス朝ペルシャは古代オリエントを統一した初めての勢力であり，また世界帝国とも称されるが，成立過程には多くの謎が残されている。また，その過程における，鉄の実用化プロセスにも着目している。こうした人類史上の課題に，理論の構築からフィールドでの調査研究に基づく実証的アプローチまで，多様な方法で取り組んでいる。
文化財学	教授	安嶋 紀昭 ※2	専門は日本美術史学。わが国の古代から中世に至る仏教絵画史と，それに関係する朝鮮半島から中央アジアまでの東洋絵画史を主たる教育研究領域とする。現存遺例に即して，X線写真や赤外線写真などの光画像計測法を応用した調査を実施し，印象論を排した客観的データに基づく表現や技法の解明を復元的に行い，文化財（モノ）の歴史上における存在意義を考究する。また，図像学を基本にした思想的背景の分析などを加え，文献史学の限界を超えた真の文化史を探求する。すなわち，美術史を学問として成立させようとするものである。さらに実査を通して，様々な状況下における文化財の適切な保存管理および修復の方法について，具体的に検証する。
	准教授	伊藤 奈保子	イスラーム化以前における古代インドネシア美術史，宗教史研究を専門とする。インドネシアをはじめ，アジアにおける仏教，特に密教の展開を，鋳造像，儀礼に用いる法具等の美術史・工芸史の観点から分析，碑文・史書・経典等を補足資料として究明を行っている。大学院演習では，学生個々人の課題に即して，アジア地域における美術工芸品の扱い方，撮影技法，調書作成等，調査方法の実習を行うとともに，同例による他地域との比較，史書や経典等との照合，社会的・歴史的背景との関連性をも含めた学際的な考察が行えるよう指導する。
	助教	中村 泰朗	専門とする分野は日本建築史であり，現在の主な研究テーマは，中近世過渡期における住宅および城郭建築（御殿や天守など）の復元的考察である。ここでは，文献史料や古絵図の調査という従来の建築史的手法に加え，発掘調査で明らかになった建築の痕跡を精査し，さらには御殿の杉戸など各地に伝存する建築部材を実測することで，今は失われた諸建築の姿を実証的に復元する。教育面に関しては，学生の興味と関心に応じて建築史に関わる様々なテーマを設定し，学生が論理的かつ多角的に考察できるよう指導する。また現地に赴いての見学や実測調査など，フィールドワークを導入した教育も積極的に行う。